

# 出荷越えり乗分処殺

## 中学生感銘「悲しみに負けず畜産」

豚熱（CSF）の感染が愛知県豊田市の民間養豚場「トヨタファーム」で国により確認されてから六日で一年。岐阜県以外の養豚施設での確認は初めてで、その感染力に全国的に衝撃が広がった。トヨタファームでは一月十四日、経営再開後初めて十頭の豚を市場へ送り出した。社長の鋤柄雄一さん（60）は、地元の理解を得ながら「少しずつ、少しずつ」立て直していくつもりだ。（森本尚平）

## 愛知の養豚場



豚熱感染からの再起への思いを託すトヨタファームの鋤柄雄一さん。愛知県豊田市中。

感染源となりえる野生イノシシと縁のない平野部の養豚場で「まさか、うちで」と驚いた。感染確認により、殺処分は五千六百二十頭に及んだ。

昨年七月、感染した全国の養豚場の先陣を切って経営を再開した。わずか豚八頭での再出発だった。

九月になると、豚五頭ほどがえさを食へなくなり、「またか、二回目はもう終わりだ」と観念した。幸い大事に至らなかったが、防疫措置をいくらか徹底しても、再感染の不安におびえる日々が続く。

十月に感染予防のワクチン接種が始まり「百パーセントではないが、多少、気は楽になった」という。

飼育頭数は現在、七百五十頭になったが、以前の十分の一。一月の総出荷頭数は十四日の十頭を含め、二十頭。感染前の月二千頭には程遠い。

地域への配慮も欠かせない。においを少しでも和らげるため、飼育頭数も感染

前より減らすつもりでいる。消毒のために養豚場周辺には石灰をまいているが、近隣の小学校の通学路でもあり、今後、保護者説明会で理解を求めていく。

豊田市内に数軒ある他の養豚農家も、豚熱の影響で休業状態。だが再開する時には、地域ブランドを確立できるよう一緒に取り組んでいきたい、と願っている。子どもたちの後押しもある。地元の中学生たちは道徳の授業の一環で、豚熱による殺処分を通し命の大切さを学んだという。

鋤柄さんにメッセージが寄せられた。「食べ物を作る人は、僕たちのヒーローだ」「今のおいしいご飯が食べられるのは、悲しみに負けず畜産をやっている人々がいるから」。気持ちのこもった言葉から、前を向く勇気をもっている。